

ヴァージニア・ウルフ、資本からギニーへ (3)

太 田 晋

3. 三ギニー

「あなた方の目標が私たちのそれと同じであることを、できるだけ実質的に証明するために、ここにギニーがあります。これは無償の贈与 (a free gift) であり、あなたが自らに課すことを自ら選択する条件以外には、いかなる条件もなしに、自由に贈られる (given freely) ものです」¹⁾。その結論部において以上のように語られる『三ギニー』(一九三八年出版)は、一般にはウルフの反戦的テキストとして知られているが、他方ブルームズベリ・グループの知己でもあったジョン・メイナード・ケインズによって、酷評されたことでも知られている。『一般理論』を出版して間もなかった当時のケインズは、『三ギニー』を読んで怒りと軽蔑をあらわにし、この旧友の著作に「馬鹿げた議論だ」と言い捨てたという²⁾。この反応には、当時のブルームズベリ・グループに由来するいくつかの理由が推測可能だが、ことによると、ケインズはあくまでも経済学者として反応したのかもしれない。この著作は、何よりもその題が示すように、貨幣とその使用法をめぐるものであるからだ。「五百ポンド」ならぬ「三ギニー」を、ファシズムおよび戦争(ファシズムに対抗する戦争を含む)に反対するために、いかにして利用するか。それがこの著作の主題である。

まず『三ギニー』のアウトラインを辿っておきたい。この著作は書簡形式で書かれており、ある男性からの手紙への語り手の返信という形をとっている。戦争の防止を目的とする協会に所属するこの男性は、「私」に協会への寄付と加入を願い出る。しかし語り手の考えでは、戦争防止のキーとなるのは「知識階級の男性の娘 (educated man's daughter)」で

ある（語り手によれば、この「ごちない言葉」は、性差を示さない「ブルジョワ」という言葉では、そこに含まれる男女間の「資産と環境」の差異が見えなくなるがゆえに使われている）。彼女たちに教育と職を与え、知的かつ経済的な自立に導くことこそが、つまるところ戦争の防止につながる、語り手はそう考える。したがって、同様に募金を願う手紙を送ってきた、ある女子大の再建基金の管財人に、そして女性の雇用を促進する団体に、それぞれ一ギニーずつを送る。その上で、この男性の協会に一ギニーを送る。こうして合計三ギニーが、戦争を防止するために送られた、ということになる³⁾。

しかし実際には、この貨幣の受け渡しはそれほどスムーズではない。たとえば冒頭では、男性からの手紙そのものが、長期にわたって死蔵されていたことが明かされる。「三年というのは、返事を出さないまま手紙を放っておくには長い時間ですが、あなたの手紙はもっと長い期間にわたって返事が書かれないままでした」（G153）。加えて、ようやく書かれたその返事には、別の人物からの手紙やその返信、これから出されるであろう手紙や、書かれはしたものの結局出されなかった手紙、さらにはそこからの断片的な引用などが、複雑に入り交じることになる。しかも、レイチェル・ボウルビーが注目しているように⁴⁾、語り手の返事には「三つの点」すなわち“…”が満ちあふれており、語り手が至る所で口ごもり、言い損ない、あるいは省略し暗示していることを示している。時間的な遅れと先行、そして複数の宛先が錯綜し、至る所に裂開と空白が口を開けたこのテキストの形態は、語り手が一種の不確実なコミュニケーション空間から語っていることを示唆しているといえよう。貨幣を受け渡すというコミュニケーションには、実のところさまざまな困難が付随しているのであって、このテキストではそうした困難が、顕微鏡的に拡大されているのである。

この困難を確証するかのように、語り手の議論もまたしばしば錯綜し、ときに空転する。語り手はまず、「知識階級の男性の娘」と「知識階級

の男性」との差異を強調することから議論を始めている。

〔知識階級の男性の娘〕にとって、「愛国心」とは何を意味するでしょうか。英国を誇りに思い、英国を愛し、英国を防衛するための〔男性と〕同じ理由が、彼女にはあるでしょうか。彼女は英国において「大いに祝福されて」いるでしょうか。歴史と伝記を繙けば、この自由の祖国における彼女の地位が彼女の兄弟のそれと違っていることが示されるでしょう。……したがって「愛国心」という言葉の彼女の解釈が、男性の解釈と違っていても無理はありません。そしてこの差異は、男性の定義する愛国心およびそれが課す義務を、彼女が理解することを極度に困難にしましょう (G162)。

このように、そもそも「考え方の違う」存在である「知識階級の男性の娘」を、教育し経済的に自立させること。つまり「利害関係のない (disinterested)」立場での批判的意見の表明を可能にし、それによって「知識階級の男性」に「間接的な影響力」を行使すること。それが「戦争を防止する」ための語り手のプランである。しかしまず問題なのは、「経済的な自立」が具体的に何を意味するか、ということだ。

たとえば語り手は、「結婚が職業であるような多数派の女性」たちに関して、家事労働に賃金が支払われていないことに着目し、そうした女性が「夫の収入を折半する精神的な権利」に基づいて「彼女の取り分を自由に使うことができる」と述べはする (G233)。しかしそれは「本当の分け前」ではないとして、すぐに否定される。彼女が依然として「家父長制」の作動域にある以上、「利害関係のない影響力」が無化されてしまうからだ。「もし夫が武力を支持するなら、彼女もまた武力を支持するでしょう」(G236)。同様に、国家が家事労働に賃金を与えることもまた、国家が戦費に「三億ポンドかそこら」を使っている以上、「そのような支出は……『実行不可能』」とされる (G318)。

他方、女性が家庭の外部で自ら職を得るにしても、当時の状況では女

性の賃金は僅少であり、このことは彼女を絶えず家庭へと、つまり「家父長制」の内部へと引き戻してしまう。そして、そこには彼女の「独立した意見」はありえない。かといってしかし、職で多くの賃金が得られればよいというわけでもない。それは「独占欲、嫉妬、好戦性、貪欲」を導いてしまい、「利害関係のない影響力」が、またしても無化されてしまうからだ。したがって、「極端な貧困」も「極端な富裕」も望ましいものではない、これら両極の「中間」こそが望ましい、ということになる。

だがそれは、具体的には女性はいくら稼げばよいということなのか。語り手は結局のところ、この問いは「私たちが閉じ込められている、実際の事実から成る確固たる世界の遠い彼方へと、私たちを連れていってしまう」と述べることしかできない（G254）。言い換えれば、そもそも「職業」が内属している資本主義システムという「確固たる世界」においては——マルクスであれば貧困化法則と呼ぶであろう原理によって——両極の中間はありえないのだ。「私たちは職を得てお金を稼がなければなりません」、しかし同時に「その職は非常に望ましくないものと思えます」（G262）。そして、このダブルバインド、語り手のいう「どうどう巡り」から脱却するために職業から退却することは、結局「家父長制」への帰還を意味してしまう。語り手はこうして、「いくらか憂鬱な結論」という形をとったアポリアに導かれる。

……知識階級の男性の娘である私たちは、悪魔と深い海との間にいます。私たちの後ろには家父長制があります。つまり私的な家と、その無益さ、その不道徳性、その偽善、その奴隷状態があるのです。私たちの前には公的な世界があります。つまり職業のシステムと、その独占欲、その嫉妬、その好戦性、その貪欲があるのです。一方は私たちを、ハーレムの奴隷のように閉じ込めてしまいます。もう一方は私たちを、頭を自分の尾に向けた芋虫のように、桑の木の周りを、財産というこの聖なる木の周りを、どうどう巡りさせるので

す。悪しき選択肢しかありません。どちらを選んでも良くないのです (G261)。

『三ギニー』の(悪)名高い主張が導き出されるのは、このアポリアからいかに脱出するか、という文脈においてである。すなわち『三ギニー』は、ほとんどウィリアム・パロウズ的な一徹さをもって、家父長制のみならず資本主義から戦争、そしてファシズムに至るまでを、ことごとく「男性」的なものとしてジェンダー化するに至るのだ。「職業のシステム」すなわち資本主義は、男性の公的な労働には賃金を支払うが、女性の私的な場での家事労働には賃金を支払わない (G230)。しかもこのシステムは、そこに内属する男性たちに「独占欲、自分の権利のあらゆる侵害への警戒、誰かがあえて異論を唱えた場合に発揮される高度な好戦性」といった特質を育んだ (G249)。男性はまた国民として「愛国心」に縛られており、彼にとっては国家の威信をかけた戦争もまた「職業」である。戦争はさらに、彼にとって「幸福と興奮の源泉」であり「それなしには男性が衰えてしまう、男性的な特質のはけ口」にほかならない (G160)。男性にとって戦争が貴重かつ不可欠なものであることは、たとえば男性の「最上の服装は兵士として身につけるそれである」ことから明らかではないか (G180)。そしてファシスト国家の指導者たち、「フューラーやドゥーチェ」は、「男性そのもの (Man himself)、男らしさの真髓、他のすべての男性がその不完全な投影であるような完璧な典型」以外のものではない (G364)。つまり『三ギニー』は、資本とネーションとステートとを、一挙に「男性」としてジェンダー化するのである。したがって先の引用におけるアポリアは、以下のように変奏されるだろう。

……私たちは、今ここで自問しなければなりません。私たちは [私たちの] 行進に加わることを望むのか、それとも望まないのか。私たちはこの行進に、どのような立場で加わるべきなのか。何よりも、

この知識階級の男たちの行進は、私たちをどこに導いているのか、と (G243)。

男性の世界への参加と同化か、それともそこからの分離と解放か。言わずと知れたフェミニズム的問題構成、第一波の平等主義的フェミニズムと第二波のリブ的フェミニズムとを分かつ問題構成をここに見だし、『三ギニー』を後者の解放主義的文脈に位置づけることは、一見すると容易である。しかしながら、よく見ればここには、楽観的な「解放」の展望がいっさい欠けていることに気づかざるを得ない。言い換えれば、行進に加わることを「望まない」にしても、何らかの「立場」で加わる以外のオルタナティブな選択肢は、ここでは提示されていないのだ。ここではむしろ、男たちの行進に外部がないことこそが、端的に確認されているのではないだろうか。

したがってここでは、同時代の日本で山川菊栄が的確に批判したような⁵⁾、女性に先験的に平和主義を仮定する本質主義（その実「社会の共同利害」と相補的に機能する）から、『三ギニー』が危ういところで逃れていることこそが、強調されなければならない。先の引用から明らかのように、『三ギニー』における女性は、戦争する男性に対して本能的な「平和主義」を担うというよりも、「悪魔と深い海との間」にあって、たんに自らの場所をもたないのだ。では、男性が属領化した公領域と「家父長制」が貫徹される私領域のどちらでもない狭間で、言い換えれば「すべて」が男性としてジェンダー化されたただなかで、いかにして「すべて」に回収されない“disinterested”な批判的立場を発明しうるのか。それが『三ギニー』の問いではないだろうか。『三ギニー』のいう「知識階級の男性の娘」、さらには「女性」は、経験のないし生物学的カテゴリーというよりむしろ、そのような立場に与えられた仮の名と考えるべきではないだろうか。「女性として、私は国をもたない。女性として、私は国を欲しない。女性として、私の国は全世界である」(G313) ——

たとえばこの名高い宣言に関していえば、そのように言いうる「女性」の場所をいかにして発明するかということこそが、ここでは問われているように思われる。

おそらくはこうした観点から、『三ギニー』の語り手は、過去の女性たちの伝記を参照しつつ、アンティゴネーを喚起する。「アンティゴネーによれば、二つの種類の法がある。書かれた法、そして書かれざる法である。一九世紀における知識階級の男性の娘たちの多様な行動は、明らかに、たんに法を破ることに向けられていたのではないし、主としてそうだったというわけでさえない。彼女たちの行動は、反対に、書かれざる法が何なのかということを発見しようという実験的な種類の努力だったのだ」(G410 n.42)。ソフォクレスの『アンティゴネー』では、クレオンの布告する書かれた国法に、神々の書かれざる法が対置される。しかし語り手は、書かれざる法は「家父長制に起源をもつ概念である…『神』によって下されるのではなく」、むしろ人間によって「世代ごとに新たに発見されなければならない」ものであり、しかも男性と女性によって「異なって解釈される」ものだという。『三ギニー』において、クレオンがファシスト的「独裁者」と同一視されていることを(G363)、したがって「男性そのもの」と同一視されていることを考慮すれば、この言明は、「男性」の法に対して書かれざる法をもって、しかも別様に解釈された書かれざる法をもって抵抗することへの示唆と考えることができる。「男たちの行進」に加わりつつ、別種の「書かれざる法」の発見を試みること。同じものただなかで、違う法を発見すること。いうなればそれが、「職業に参入し、かつ文明化された人間、すなわち戦争の防止を願うような人間であり続けることが、どうすればできるのか」(G262)という問いへの、語り手の答えではないだろうか。

別種の「書かれざる法」を発見するための「実験的な種類の努力」。スティーヴン・バーバーは、『三ギニー』における「書かれざる法」を、フーコー(ないしニーチェ)が「道徳」に対置する意味での「倫理」と

同一視している⁶⁾。あるいは、ことによるとそれは、ジャック・ラカンが『アンティゴネー』解釈において述べた、「純然たる死の欲望」でもあるような「倫理」なのかもしれない⁷⁾。いずれにせよ、それを発見しようという「努力」は、その背後に「多くの異なった、しかも多くは互いに矛盾する感情」を有しているため、それを「タグヤラベル」に集約することはできないと語り手はいう。したがって「フェミニズムという古い名」は「破棄しなければならない」し、「女性の解放」という言葉もまた同様である（G356）。そして興味深いことに、語り手はそのような「努力」を行なう者たちの共同体に、あらためて奇妙な名前を与える。それが「部外者協会（the Outsiders' Society）」である。

では、知識階級の男性の娘たちが創立し加入するかもしれないような協会、あなたの〔戦争を防止するための〕協会の外部にありつつ、その目的においては協同する協会の外郭を、手早く描いてみましょう。まず第一に、この新しい協会は、……名誉管財人を置かないでしょう、それは資金を必要としないでしょから。オフィスも、委員会も、幹事もないでしょう。それは会合を召集しないでしょし、会議を開くこともないでしょう。もしこの協会に名前がなければならぬのであれば、それを「部外者協会」と呼ぶことができるでしょう（G309）。

この謎めいた協会（Society）は、まずは男性の公的な共同体に、すなわち兄弟愛による結社（brotherhood）としての社会（society）に対置されている。後者を特徴づけるのは、語り手によれば、女性に対する諸々の禁止である。『『社会』』という言葉そのものが、記憶の中で陰鬱な吊鐘を鳴らして耳障りな音楽を奏で始めます。……何々するべからず——何世紀にもわたって、兄弟の姉妹に対する社会の関係はこのようなものでした」。だがそもそも、「人々が社会へと結集することの中には、個人の中にある最も利己的で暴力的で、不合理かつ非人間的なものを解放して

しまう何かがあるのではないでしょうか」⁸⁾。しかし「新しい社会 (a new society)」がそれに代わる日は「はるかに遠いのです」(G307-08)。かくして、今ここで別の「協会 (Society)」が要請されることになるだろう。その「部外者協会」の概要は、あらためて以下のように語られる。

おおまかに言って、外部の協会である私たちと、内部の協会であるあなた方との主な違いは、以下のようなものでなければなりません。あなた方は、自分の地位によってもたらされる手段を利用します。同盟、会議、組織活動、著名人、そして自分の富や政治的影響力によって手が届くものになるような、あらゆる公的な手段を利用するわけです。一方、私たちは、外部に留まりつつ、公的な場で公的な手段によってではなく、私的な場で私的な手段によって実験を行なうでしょう。これらの実験は、たんに批判的なものではなく、創造的なものとなるでしょう (G320-21)。

禁止によって特徴づけられ、全体の中での構造的な地位によって利用可能な手段が規定される「あなた方」男性の協会＝社会に対して、「外部の協会である私たち」は、私的な場に拠点をおきつつ「外部に留まる」とされる⁹⁾。その限りで注意すべきなのは、ここでいう「外部の協会 (outside society)」が社会の「構成的な」外部ではないということだ。言い換えれば、それは公領域から排除された私領域とは必ずしも一致しない一方で、さらにそこから排除された領域に定着しているわけでもない。それは私領域に身を置きつつ、内部とそこから排除されたものが形成する「全体」に対して、さらにそこから足を踏み外しつつ「実験」を行なうような協会なのだ¹⁰⁾。つまりそれは、公領域と私領域との分割に始まる内部と外部の境界設定をいくつものレベルで反復するひとつの全体に対して、その内側にありつつも、この全体そのものに収まらない多数多様な剰余を携え、別様の「書かれざる法」を見いだそうとする多

数多様な「努力」をなす者たちの協会なのである。

そしてこの「部外者協会」への言及と前後して、『三ギニー』は未来のためのプログラムであることを止める。言い換えれば、「知識階級の男性の娘たち」の教育や雇用の未来というよりも、現に行なわれている「実験」や今ここで実行可能な作業へと焦点が移されるのだ。たとえば、多くの市民が軍需工場で働く町で、それが戦争のためになるのなら靴下を繕うことすらしたくないと述べてみせた女性市長。あるいは、スポーツの試合はそれ自体を好む人が行なうべきである以上、「利益を刺激する」賞品は不要だと述べた女性。さらに、教会から若い女性の姿が減ったという新聞記事は、語り手によって「教会から知識階級の男性の娘たちがいなくなればどうなるかを発見しようとする試み」と読み替えられる（G327）。そして、この三番目の試みのような「受動的実験」は、意に反することは書かない、読まないといった「文化と知的自由を守る受動的方法」とも関連づけられる（G298）。加えてより積極的な方法として、ウルフ夫妻がそうしたように、自ら出版社を興すこともまた推奨されるだろう（G296-97）。こうした局所的で散発的な「今ここ」での実験が、「知識階級の男性の娘たち」の未来のプログラムに代わって、前景化し始める。あるいはそれらは「今ここ」というよりも、本論文第二章の言葉を使えば、現在から未来への直線的時間から逸れてゆく、斜めの位置にあるといった方がよいかもしれない。そうした斜めの位置にある者たちを結び付けるもの、局所的で散発的な実験者たちが加入することなく加入している仮想の共同体、それが語り手のいう「部外者協会」である。

およそこうした意味において、ジェシカ・バーマンはウルフにおける共同体を、ジャン＝リュック・ナンシーのいう「無為の共同体」と関連づけている¹¹⁾。いかなる共同体にも所属しないことで所属する、言い換えれば分かれて有ることが分有される「無為の共同体」。事実『三ギニー』においては、「非現実的な忠誠心からの自由」という名のもとに、

「誇りや国籍」および「宗教、大学、学校、家族、性別」に由来するプライドと忠誠を捨てることが課され (G271)、また「メダルや名誉や学位」の拒否も述べられている (G291)。こうしてあらゆる帰属を拒絶した者たちが、まさにそのことによって帰属する「部外者協会」には、確かにナンシーの概念と通底するものがある。しかし、『三ギニー』の「コスモポリタンのかつアナキスト的」側面をより積極的に評価するには¹²⁾、むしろ、バーマン自身が別の箇所で行っているように、WCGとの関連で「部外者協会」を検討することが、より有益ではないだろうか。

実際、WCG年次大会における「こことよそ」の認識のエコーを「部外者協会」に見いだすことはたやすい。本論文第一章で検討したように、ウルフは一九一三年のWCG年次大会の回想において、絶対的に分け隔てられた「私たち」と「彼女たち」という認識を記していた。しかし『三ギニー』に至ると、それはむしろ分け隔てられてあることを共有する「部外者協会」として、積極的に捉え返されることになる。ウルフの思考は、距離の廃棄を目指す疎外論ではなく、いっそうユニークな実践的思索へと向かっていったのだ。ここで何より重要なのは、WCGが女性の消費共同組合であった点を、想起することだと思われる。なぜなら、『三ギニー』において語り手が行なっているのは、何よりもある種の消費、すなわちギニーの受け渡しであるからだ。本論文ですで見たとように、遺贈された資本は、WCGとの関わりにおいて「私たち」と「彼女たち」とを分け隔てるものとして立ち現れたが、『部屋』においては「五百ポンド」の定収入として、資本の時間に対する斜めの位置に留め置かれ、女性はそれをこそ所有すべきだと主張された。そして『三ギニー』では、それはポンドからギニーへと、つまり日常的な流通貨幣とは異なる特殊な通貨単位に姿を変えて、ついにコミュニケーションの場に差し出されるのだ。そしておそらくは、いうなればコミュニケーション・メディアとしての貨幣の使用こそが、「部外者協会」のメンバーとしての、『三ギニー』の語り手の「実験」なのである¹³⁾。

それは具体的にいえば、通常の流通からは外れたギニーという特殊な通貨単位を用いて、いかにして新たな等価性を確立するか、という実験だ。実のところ、戦争を防止する協会への寄付を求める手紙を出した男性は、彼の協会への署名と加入をも語り手に求めていた。しかし語り手は「部外者」であり続けるために（言い換えればdisinterestedであり続けるために）、男性の協会=社会への署名を頑なに拒む。

[男性の]「社会」に関する私たち自身の経験が、私たちに思い描かせてしまうような光景を、発現させるべきではありません。ですから、私たちは個人としてのあなたには謹んで敬意を表明し、その使い途をあなたが選ぶことのできる一ギニーを差し上げることでその敬意を確証する一方で、私たちは、あなた方の協会への加入を拒むことによってこそ、最も効果的にあなた方の手助けをできると信じているのです。つまり、……私たちとあなた方との共通の目的のために働くことによって——ただしあなた方の協会の内部ではなく外部で（G309）。

ここで問われているのは、いわば「無為の共同体」と「営為の共同体」とのコミュニケーションである。そこでは、両者に共有される水平なコミュニケーションの地平を前提とすることができない。したがってここでは、すなわち複数の共同体の界面においては、何らかのものが両者を媒介することが必要になる。つまり（あなた方のいう）「戦争を防止すること」が（私たちのいう）『男性』のシステムを総体として批判すること」と等しいということが、何らかの形で示されなければならない。語り手は両者が「共通の目的」を有していることを明らかにするために、つまり両者の目的の等価性を確立するために、延々と粘り強い説得を続ける。そしてここでのギニーは、『三ギニー』という書物を通して遂行される、この交渉過程そのものの相関物にはかならない。

しかしこの交渉は、困難を極める。たとえばその過程で、語り手はしばしば、貨幣によるコミュニケーションに限界を感じたかのように、言葉による「条件」を付したうえでギニーを下賜するという方向に傾いてしまう。「……将来において職業が、違う歌と違う結論を導くように営まれるようにすると誓うという条件を付けなければならない、そう警告することなしには……ギニーをお送りすることはできません」(G238)。さらに語り手は、貨幣そのものに命令を付すという、奇怪な幻想を思い描かずにはいられない。

手にしたお金のうちギニーも、古いプランによる大学の再建に使われるべきではありません。[しかし]新しいプランに基づいた大学の建設に、一ギニーも使われることがあり得ないのも同様に確実です。したがってこのギニーには「布きれ、ガソリン、マッチ」という目印を付けなければなりません。そして以下のような添え書きを付さなければなりません。「このギニーをお取りなさい、そしてこれを使って大学を跡形なく焼き尽くしなさい。古い偽善に火を。燃える建物の明かりが夜啼鶯を怯えさせ、柳を赤く染めるように。そして知識階級の男性の娘たちが炎を囲んで踊り、両手一杯に枯葉を積んで炎に投げ込むように。そして彼女たちの母親が上階の窓から身をのり出し、こう叫ぶように。『燃えろ! 燃えろ! だって私たちはこういう〈教育〉を受けたんだから!』」(G202-03)。

『三ギニー』からこの箇所を引用する『今は亡き灰』のジャック・デリダは¹⁴⁾、同じテキストにおいて、「そこには灰がある」と繰り返している。デリダの示唆を敷衍していえば、命令が付された貨幣によって¹⁵⁾、大学が「跡形なく」焼き尽くされた後で「残るともなく残る」灰。『三ギニー』においては、ある意味でそのような形で、ギニーが「残るともなく残る」ことになるだろう。それは最終的に、水平に交換されるので

はなく、垂直に下賜されるのでもなく、説得と交渉を通じた斜めの飛躍によって等価性を達成する。つまり「あなた方」と「私たち」とが「共通の目的」をもっていること、同じ目的に別様に接近しようということが、末尾に至ってようやく確証されるのだ。

……私たちは、あなた方の言葉を繰り返したり、あなた方のやり方に従うのではなく、新しい言葉を見つけたり、新しいやり方を創造することによってこそ、あなた方が戦争を防止するのを最もよく手助けできるのです。あなた方の協会に加入するのではなく、その外部に留まることで、しかしその目的をもって協同することで、あなた方が戦争を防止するのを最もよく手助けできるのです（G366）。

こうして「協同」を可能にする等価性を達成することで、ギニーは事後的にはたんなる「無償の贈与」として、本章冒頭の引用にあるように「いかなる条件もなく」贈られるものとして扱われることになる。なぜなら、「あなたが選ぶその使い途」や「あなたが自らに課すことを自ら選択する条件」が、「あなた方」と「私たち」に共通する目的へと「あなた方」を導くということが、交渉によって明らかになったからだ。ギニーはこうして、新たな等価性の確立を終え、消滅する媒介者として、灰のように「残るともなく残っている」。通常は何らかの協会への加入と寄付に使われる、その「同じ」ギニーが、ここでは明らかに「違う」ように使われている。

このプロセスの詳細を検討する余裕はもはやないが、『三ギニー』が一冊の書物を通じて行なったこの「実験」は、「部外者協会」と同様に興味深い。土佐弘之は『三ギニー』に「アウトサイダーによる非暴力化の道」を見いだしているが¹⁶⁾、それはたとえば『三ギニー』の語り手が自ら行なっているような、特殊な貨幣を媒介とした等価性の確立を通じて、実践されるのではないだろうか。たとえば、このマイクロな等価性

の連鎖を、利潤や搾取をもたらさない通貨によってつなげてゆくこと。あるいはまさにこの連鎖によって、「部外者協会」の局所性や散発性を連関させること。もしくはWCGがそうであったような消費協同組合を、そこにリンクすること。そして、かつてウルフが述べたように、資本主義を廃棄することが心理的に必然だというのなら、ケインズ主義の半世紀を越えて『三ギニー』の示唆を、すなわち特殊な通貨によるコミュニケーションとアソシエーションを、あらためて構想することもできるかもしれない。

むしろそこでは、通常の貨幣の受け渡しでは不可視化されている「命がけの飛躍」が、あらためて表面に露出するだろう。言い換えれば、特殊な貨幣の受け渡しに際しては、ウルフが一冊の書物を必要としたほどの交渉と説得が、その都度不可欠になるだろう。そのコミュニケーション的困難は、避けることができないかもしれない。比喩的にいえば、手紙は宛先に届かないかもしれない。しかしながら、書簡形式で書かれた『三ギニー』、この二〇世紀のデッド・レターが、時ならぬ時に宛先ならぬ宛先へと送付されることもまた、ありえないことではないように思われる¹⁷⁾。

註

- 1) Virginia Woolf, "Three Guineas," *A Room of One's Own/ Three Guineas* (Oxford: Oxford University Press, 1992), p.367. 以下、“Three Guineas”からの引用はGと記し、本書の引用頁数を本文中に並記して示す。
- 2) cf. Quentin Bell, *Virginia Woolf: a Biography* (New York: Harcourt Brace Javanovich, 1972), vol. II, p.205.
- 3) 「ギニー」とは、元来は一六世紀後半から一八世紀初頭にかけて鑄造された金貨を指していたが（一八世紀末の恐慌で、人々がこのギニー貨に殺到したことはよく知られている）、その流通が途絶えてからは、特殊な機会にのみ使われる通貨単位として、その名前だけが残っている。そうした特殊な機会のひとつこそ、*OED*によれば「協会や機関への寄付」である。

- 4) Rachel Bowlby, *Feminist Destinations and Further Essays on Virginia Woolf* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1997), pp.137-45.
- 5) たとえば以下を参照。山川菊栄「満州の銃声」、鈴木裕子編『山川菊栄評論集』(岩波文庫、一九九〇年)、一八一頁。
- 6) Stephen Barber, “Lip-Reading: Woolf’s Secret Encounters,” in *Novel Gazing: Queer Readings in Fiction*, Eve Kosofsky Sedgwick, ed. (Durham: Duke University Press, 1997), p.408.
- 7) ジャック・ラカン『精神分析の倫理(下)』(小出他訳、岩波書店、二〇〇二年)、一七六頁。
- 8) ここに引用した語り手の言葉は、フロイトの集団心理学および社会論を想起させずにいない。ちなみに、よく知られているように、自らの出版社からフロイトの英訳を刊行し、しかもフロイト本人とロンドンで面会までしつつ、ウルフは「フロイトを読むことをあえて避けてきた」と述べている。しかし、読書ノートから、彼女が明らかに読んだことが確認される数少ないフロイトの著作が、『集団心理学と自我の分析』および『トーテムとタブー』である。
- 9) 「群れのただ中にあり、しかも同時に完全に外に、はるか遠くにいること——つまり縁(ボーダー)に、ヴァージニア・ウルフ流の散歩だ」(ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『千のプラトー』、宇野他訳、河出書房新社、一九九四年、四六頁)。ちなみに『千のプラトー』の著者たちは、国家装置の外部の生を「戦争機械」と名指すことになるが、同書を再検討する宇野邦一は、この呼称への一定の留保を示している。「もはや戦闘も戦争もモデルにしない「外部性」を、まだ「戦争機械」と呼ぶ必然性があるのかどうか」(宇野邦一『ドゥルーズ群れと結晶』、河出書房新社、二〇一二年、二四五頁)。私たちはそうした外部性の呼称として、一九三八年のウルフが提案した「部外者協会 (the Outsiders’ Society)」は、未だ適切であり続けていると考える。
- 10) ここでは、ウルフと同様にアンティゴネーを召喚することによって、「公領域と私領域との境界が構成的な外部の生産を通じて保証されていること」や「血縁関係によって、公領域と私領域とを媒介するリンクがもたらされること」を見過ごしたアーレントを批判する、ジュディス・バトラーの言葉が示唆的である。バトラーによれば、アンティゴネーは「人間には属さないが人間の言語を語る。行為を禁じられながら、にもかかわらず彼女は行為する、そして彼女の行為が、現行の法規にたんに同化することはほとんどない。行為する権利をもたぬ者として行為することで、彼女は、人間の前提条件である血縁関係の語

彙を転覆し、そのような前提条件が本当は何であるべきなのかという問いを、暗黙の内に私たちに提起する。彼女は自らがそこから除外されている権利付与の言語の内側で語りつつ、いかなる最終的な同一化も不可能な主張の言語へと参与する」。Judith Butler, *Antigone's Claim: Kinship Between Life and Death* (New York: Columbia University Press, 2000), p.82.

- 11) Jessica Berman, *Modernist Fiction, Cosmopolitanism, and the Politics of Community* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), pp.121-39. 他方、ここで詳細を検討する余裕はないが、『三ギニー』を含む後期ウルフのテキストにおいて、表面的なコミュニケーションが挫折する一方で「自己との関係」がいわば斜めにずれていき「秘密の出会い」が達成される、という「クイアな関係性」を見いだすスティーヴン・バーバーの解釈もまた、極めて興味深い。Barber, *op.cit.*, p.404.
- 12) たとえば以下を参照。土佐弘之『グローバル／ジェンダー・ポリティクス 国際関係論とフェミニズム』（世界思想社、二〇〇〇年）、二四―二六頁。土佐が指摘するように、『三ギニー』のこうした側面は、とりわけイギリスの反核運動にインスピレーションを与えてきた。
- 13) こうした貨幣観に関しては、以下を参照。西部忠『資本主義はどこへ向かうのか 内部化する市場と自由投資主義』（NHK出版、二〇一一年）、とくに第五章。
- 14) Jacques Derrida, *feu la cendre* (Paris: Des femmes, 1987), p.51.
- 15) ここでいう「命令を付された貨幣」を、たとえばエズラ・パウンドの貨幣改革構想における、権力のパフォーマンス的な表明としての貨幣、国家によって聖別された労働の証書としての貨幣と比較してもよいかもしれない。私たちはこの点に関して、以下で議論したことがある。太田晋「再分配の詩的正義 エズラ・パウンドの異端的経済論」、『批評空間Ⅲ-3』（批評空間、二〇〇二年）、二二―二四〇頁。
- 16) 土佐前掲書、二五頁。
- 17) たとえば晩年のスーザン・ソントグは、イラク戦争の時期に『三ギニー』への応答を行ない、『三ギニー』において「あなた方」と「私たち」との交渉の発端をなす戦争写真に関して、両義的な考察を行なった (Susan Sontag, *Regarding the Pain of Others* [New York: Farrar, Straus and Giroux, 2003])。ソントグによれば、ウルフはここで「写真の衝撃」を共通体験として、戦争反対という「あなた方」と「私たち」との合意を形成しているが、そこでの戦争写真は戦争への一般的で抽象的な嫌悪を伝えるものとしか認識されていない。しかし実際には、写真は

特定の状況における特定の犠牲者を特定の視点から撮影したものであり、ウルフはこの次元（たとえば『三ギニー』で提示されるスペイン内戦の写真で言えば、その具体的・歴史的経緯）に注意を払っていない。「ウルフがそうしたように、写真の中に戦争に対する一般的な嫌悪の確認のみを読み取ることは、一歩身を引いて歴史をもつ国としてのスペインとのかかわりを避けることである。それは政治を切り捨てることである」。

だがソントグ自身いうように、逆に戦争の具体的・歴史的経緯に身を沈めたとき、人が往々にして戦争の続行への是認や（特定の犠牲者を殺した特定の）敵に対する憎悪へと導かれることもまた事実である。それはそれで政治の抹消であり、かつ写真の抹消ではないのか。したがってつまるところ、「一歩退いて考えることは何ら間違っていない」ということになる——ただしその一歩は実のところ無限の距離であり、他者の苦痛を映像によって表象することには限界が、また多くの危険があることが強調されたうえで。こうした両義性のゆえに、テキストの結論部で再提示される「人は映像によって、戦争反対へと積極的に動員されうのだろうか」というウルフ的問いかけに、ソントグは両義的にしか答えていない（ソントグがそこで挙げる反戦映像の範例は、「われわれはその〔戦争〕体験がどのようなものであったか、本当には想像できない」ということを、つまり想像不可能であること自体を想像させる、逆説的な映像だ）。

私たちの出発点にあったのは、実のところ、このソントグのディレンマ、具体性と一般性のディレンマであった。そのうえで私たちは、『三ギニー』の可能性の中心は、写真というよりむしろ貨幣にあると考えた。貨幣は、モノから具体的な固有性を捨象し、商品として一般化するメディアと考えられている。しかしながら、『三ギニー』におけるギニーの特異な使用はむしろ、具体的な状況の差異を保持したままその等価性を確認することに貢献している。『三ギニー』において、「あなた方」と「私たち」との合意を形成しているのは、衝撃的な写真というよりむしろ、コミュニケーション・メディアとしての特殊な貨幣なのだ。